

## 1. 幼児の漢字教育は“適時教育”

### 早期教育でも英才教育でもない

私の提唱する“幼児の漢字教育”は、早期教育の一つだと思っている人が多く、

英才教育の一つだと思っている人も多い。いずれも間違いです。英才教育は大切であり、必要だと考えている私ですが、これは英才教育では絶対にありません。早期教育に至っては、私は大反対なのです。その大反対の早期教育を主張するわけがありません。教育は、遅過ぎてはいけませんが、早過ぎてはいけません。教育には、その内容によって、それぞれを学習するのに最も適した時期があるのであって、それより早めて成功することはあり得ないのです。

幼児の漢字教育は“適時教育”です。幼児期が、一生のうちで最もやすやすと漢字が覚えられる唯一の時期で、この時期を外すと漢字学習が困難になります。今、学校の漢字教育がうまくいかないのは、漢字学習の適時期を逸したためなのです。

ところが、この事実が今までの常識とあまりにもかけ離れているの

で、多くの方がこの事実をなかなか信じません。「自分が小学校や中学校で苦しんだ漢字が、幼児にやすやすと覚えられるわけがない」というわけです。

私を含めて、世の人々は適時期を外して漢字を学習してきました。だから、「漢字は難しい」と心の底からつくづくと思うのです。

幼児の早期教育(実はやはり適時教育)の先駆者である鈴木鎮一先生のバイオリン教育でもそうでした。

まず、「幼児にあの難しい曲が弾けるわけがない」と言って否定しました。ところが幼児が見事に弾くを見ると、今度は「幼児にあの曲が理解できるわけがない」と言うのです。「大人に難しいものが、幼児には容易に出来る」ということは、このように解りにくいのです。

鈴木先生は、ドイツ留学中、ドイツの子供たちがドイツ語を自由に話しているのを見て、その教育法を発見されたといえます。母国語の学習は、幼児期だから易しく習得できるのです。成人してから学習するのだったら、外国語の学習と同じで、難しいものになります。

これも、「大人には難しいことが、幼児には容易に出来る」ことの一例です。しかし、これでもまだ「漢字学習は幼児期には易しい」ことが信じられないという方には、それを証明する徹底的な事実を披露しま

しょう。それは、「幼児は、言葉がまだ覚えられないうちから、漢字は理解でき、覚えられる」ということです。

**漢字は言葉よりも覚えやすい**

一歳半の赤ちゃんだったら、普通、“うんま”“まんま”“てーで”“たーた”というような幼児語が 30

～40 語言えるのがやっとなです。ところが、私が提唱した方式により、生後十か月頃から漢字カードで漢字を教えられた田中庸介君と又古孝旨君は、一歳半の頃には、三百語の漢字を理解し、読んだのです。

二人とも私がそれを確認したばかりでなく、庸介君の場合は朝日新聞東京本社の記事が、孝旨君の場合は沖縄タイムスの記事が、それぞれこれを確認し、各新聞紙上にこれを報道しました。明らかに、幼児にとっては、漢字の方が言葉よりも覚えやすいのです。

それは信じがたいくらい意外なことに思われるかもしれませんが、よく考えてみれば、どなたにも納得できる理由があります。その第一は、言葉は口から発せられると同時に消滅してしまうので、発せられた瞬間にこれを捉え、かつ覚えなければならないのです。

しかも、言葉は、いくつもの音声が一定の順序に並んで組立てられていて、最初の音声の正体さえはつきりと掴まえないうちから、次々に飛び出てくる異なった音声を、その順序を違えずに受取り、かつ頭の中に貯えなければならないのです。

さらにその上、そういう音声の一定の連なりを聴覚中枢に貯える一方、それに対応する意味内容(多くは視覚的な存在)を別の感覚中枢に貯え、この両者を連絡させなければなりません。言葉を覚えることは、このように大変な仕事なのです。

これに比べたら、漢字を覚えることなどお話にならないくらい易しいのです。例えば、“花”という漢字は、その内容である花そのものと同

ㄅ ㄆ ㄇ

**部首 虫**

まむしの象形。

【蟻】 正義の意味の義と虫との会意形声字。“秩序整然たる団体生活を営む虫”“あり”を表す。

【虹】 虫は地中、地上のみならず空中にもいる。そして大きいものから小さいものまで多数いる。空中の虫が工作をしたように見えることから、「虫」と「工」で虹を表している。

じ視覚的なもので、記憶に納まるまで、決して消えることなく待っていてくれます。だから必ず覚えられます。

また、言葉は時間的に連続した信号なので、それを聞いている間は一瞬の油断も許されません。途中の音声を一つでも受取りそこねたらおしまいです。ところが、漢字は、一瞬のうちに把握できる空間的な図形で、しかも、その図形が頭の中に確実に納まるまで待っていてくれるのです。

だから、言葉だと30か40しか覚えられない幼児が、漢字だとその十倍も覚えられます。

### 漢字は視覚的印象が強い

言葉の覚えられない、重度の脳障害児を指導したことがあります。物と、その物の名を表した漢

字カードを一緒にして置き、漢字がその物の名前を示す符号であることを教えます。例えば、花瓶の花に“花”という漢字のカードをぶらさげておき、「“花”が花を表している」ことを教えるのです。このような漢字カードを数枚教えた後、それぞれのカードを物と対応させて置く仕事を課します。すると、それまで全く光のなかった目をきらきらさせて

これをやるのです。このような子供も知的な作業は喜んでやるのです。

このような学習を、毎日、繰り返し、繰り返しやらせていると、ある日、突然、花を指さして「はな」と言い、“花”という漢字カードを指さして「はな！」と読むようになります。易しい漢字の学習が、それより難しい言葉の学習を成功に導いたのです。このように、漢字の学習は、言葉の学習を容易にする効果があるだけでなく、言葉の理解を深めたり、記憶を確実なものにするのにも役立つのです。

例えば、“時刻と時間”という言葉は漢字で学習すれば、その理解が正確で、かつ深いものになります。だから、漢字で学習した子供たちは、「明日の遠足の集合時間は八時三十分！」という教師の言葉の誤用を決して聞き逃しません。

古語で、物の突き出た所を表す言葉に“はな”という言葉があります。“端”という漢字がこの言葉の意味を表しています。“鼻”は、顔の中に突き出た所なので“はな”と呼んだものでしょう。

同様にして“花”も、草木の茎や枝の突き出た所に咲くものなので“はな”と呼んだのでしょう。つまり、“鼻”は“顔の端”であり、“花”は“茎や枝の端”であり、端と花と鼻はもとは同じ言葉だったのです。

それを漢字で表す際、使い方の違いによって、これを区別して表した方が判りやすい、ということで、それぞれ別の漢字を当るようになったのです。それが今では、字が異なるために、同音異義語のように思われています。

“橋と箸“釜と鎌”“歯と葉”のような同音異義語も漢字と共に学習した方が解りやすく、かつ記憶に留まりやすいのです。聴覚的な言葉に視覚的な文字を関係させて記憶すると、言葉だけである記憶の六倍半の記憶効果がある、という調査結果もあります。

昔から「百聞は一見に如かず」と言われているように、視覚的印象が聴覚的印象よりも強く優れ、効果の大きいことはだれでも認めるところです。従って、その視覚と聴覚と結び着いた記憶が、聴覚だけの記憶よりも強固なものになることは、言うまでもないでしょう。

ところが、わが国の小学校では、“じかん”“じこく”というような“かな”表記で言葉の学習をさせています。表音文字であるかな表記では、“時刻”“時間”のような視覚文字の効果が出てきません。だから、時刻と時間の概念の違いを教えているのにもかかわらず、理解が浅いため、すぐに両者を混同してしまうのです。

㊦㊧㊨

## 「花」と「華」と「鼻」

【花】 化と草との会意形声字。化は、人とヒとの会意形声字。ヒは𠂔で、人の倒れた形を表したもので“死ぬ”こと。よって化は“人が死ぬ”こと。死は大変化なので“かわる”意味に使われ、死んで“化ける”という意味にも使う。花は、言わば“草のお化け”。

【華】 艹と垂の会意字。花の美しく垂れた形を表している。花の古字。現在は“草のお化け”の「花」の方が多く用いられ、「華」は“花やか”のこと。

【等】 自は鼻の象形で“はな”が本義であるが、自分を指さす時に鼻をさすので、“わたくし”という用法が生れた。

ちなみに「私」は。<sup>わたし</sup>ム<sup>いね</sup>の禾”という意味で“自分”のこと。「ム」は𠂔で鼻の象形で自と同音同義。つまり、鼻は、自が“私”の意味に転用されたために、𠂔(毘)を加えて作った形声字である。